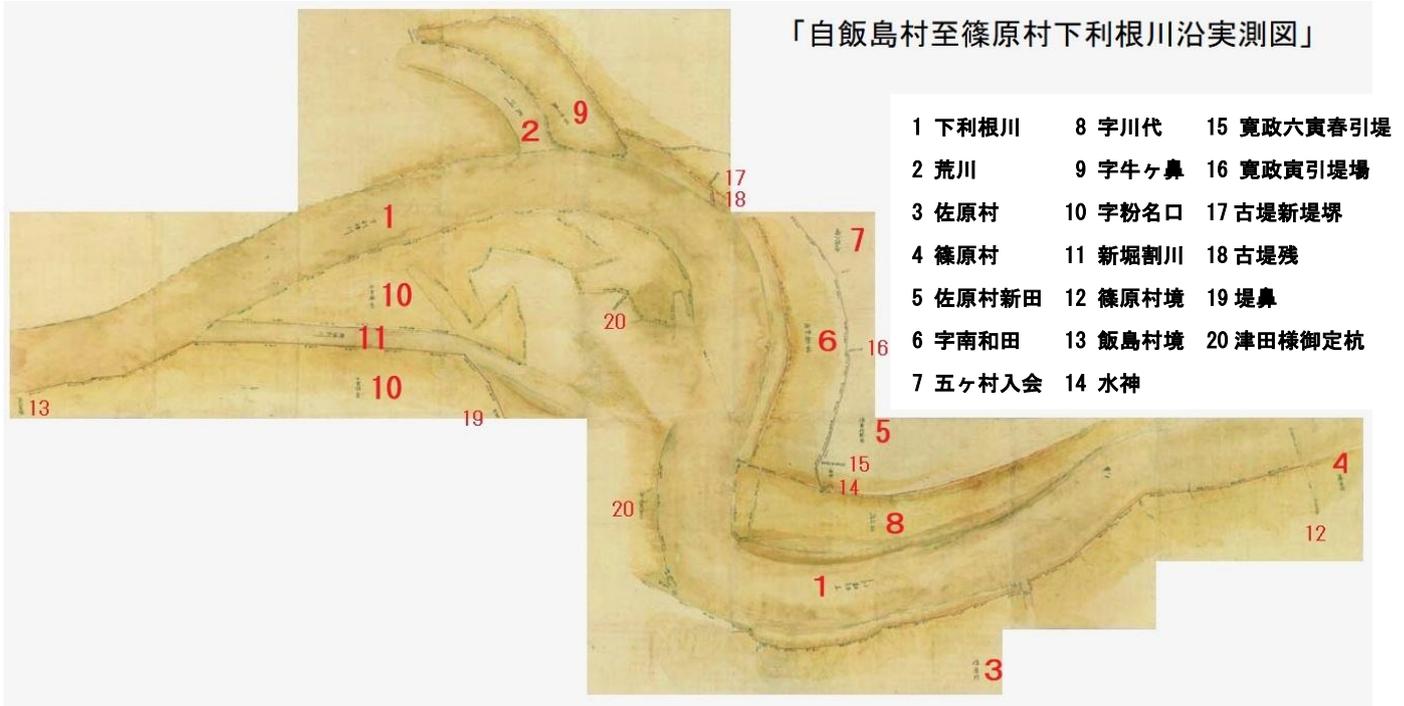


展示品一覧

○ 下利根川沿実測図（佐原村沿いの利根川兩岸）

「自飯島村至篠原村下利根川沿実測図」 国宝：地図・絵図類 番号532

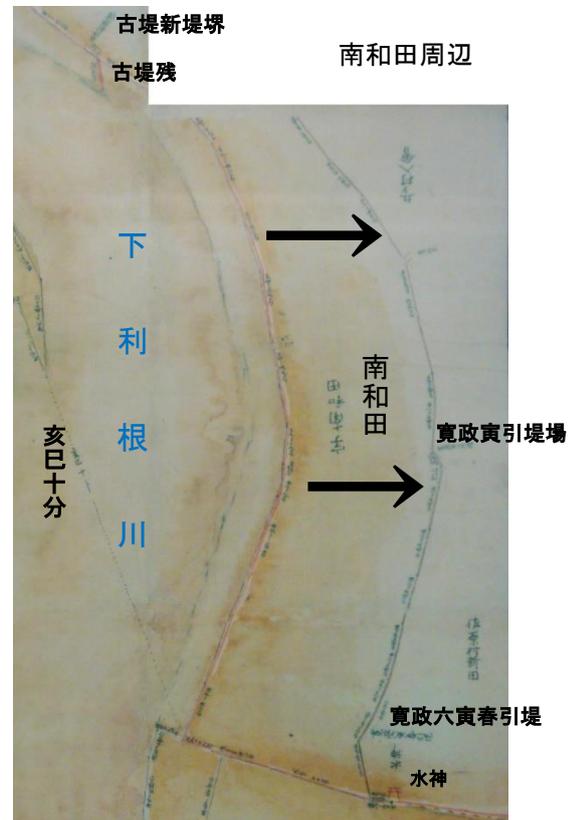
この実測図は会報42号で佐久間達夫氏が紹介したもので、利根川下流河川事務所が作成した複製パネルが「道の駅・川の駅 水の郷さわら」2階の防災教育展示の一角に置かれている。朱字は実測図に書き込まれている地名など拡大したものである。



この実測図の作成年代については、地図中の「水神」付近に「寛政六寅春引堤」との記載があることから、寛政6年と推測される。寛政6年12月には忠敬は隠居して勘解由を名乗り、翌寛政7年3月には妻ノブが江戸の桑原邸で死去、5月には江戸深川黒江町に居を構え高橋至時入門した。

伊能家の記録『旌門金鏡類録』第2巻の寛政6年の春2月27日の記事に、この実測図を作成した背景と思われることが記されている。寛政6年2月27日、「荒地起し返し御見分」のために、勘定奉行の柳生主膳正の一行が佐原村に到着した。「荒地起し返し」とは、洪水等により耕作出来なくなった田畑を復旧することであり、見分つまりその検査確認のための来訪である。

翌28日の勘定奉行の視察には、忠敬が名主など佐原村の村役人をひきつれて案内にあたった。最初に勘定奉行の一行は船で南和田の「川欠け潰れ地」を視察した。「川欠け潰れ地」は河川の氾濫で生産力を失った田畑である。それから粉名口の「荒地御見分」のあと、上流側の村に向った。「寛政六寅春引堤」の「引堤」とは、右図矢印のように、洪水対策として堤防を後方に移動して川幅を広くすることである。その結果として南和田の古堤と新堤の間の帯状の地域は耕作できない「川欠け潰れ地」となり無年貢地となる。伊能忠敬が下利根川沿いを実測したのは、勘定奉行による「南和田川欠け潰れ地」と「粉名口荒地」の「荒地起し返し御見分」のために準備したものといえるのではないだろうか。実測図中には「卯七分 五十間」「辰一分 十一間」の様に、各区間の方位と距離が記されており、導線法による測量である。また粉名口の南東端と古堤南端の間では測線があり、「亥巳十分」と方位を測って、位置関係を確認している。



次の大図2鋪は文化元年8月1日に幕府に提出し、9月6日に將軍徳川家斉の上覧を受けた「日本東半部沿海地図」の控図である。そのため最終上呈版とは区割りも大図の番号も異なる。



国土地理院
「伊能大図彩色図」
44・45から作成

○ 大図（岩手・青森県境付近沿岸）

「自江戸至奥州沿海図 第十五 〈自中野／至市川〉」

国宝：地図・絵図類 番号71、縮尺36,000分の1

享和元年10月9日に中野村の止宿清五郎を出立して、11日に市川村の止宿兵太に到着するまでの測量の成果である。11日の測量日記には「六ッ半前鮫村出立。此日海辺なり」、忠敬先生日記では「海辺白砂にて宜し」とある。海岸線に近づくことも困難であった三陸海岸測量が終わり、緩やかに弧を描く海辺の砂浜を測量する安堵感が伝わってくる。測量は地形的には楽になったが、気候的には風雪が待ち構えていた。



国土地理院
「伊能大図彩色図」
44・45から作成

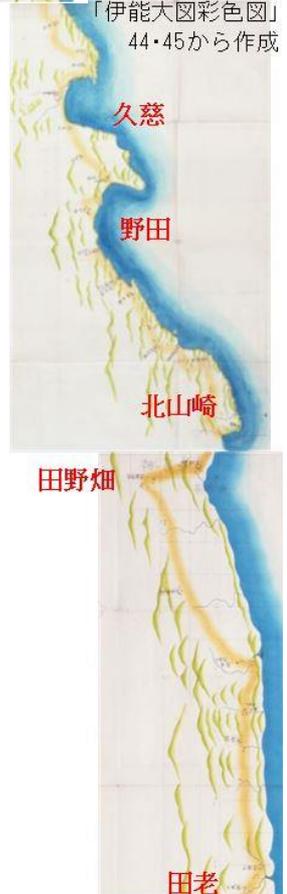
○ 大図（岩手県北東部沿岸 宮古市～洋野町）

「自江戸至奥州沿海図 第十四 〈自田老／至中野〉」

国宝：地図・絵図類 番号70、縮尺36,000分の1

長く続いた三陸海岸南部のリアス式海岸も宮古で終り、測量日記にもこれまでの「船中引縄にて測る」という記事がなくなる。大図を見ても海岸線の出入りが少なくなっている。忠敬先生日記の10月5日の欄外には「田野畑より黒崎四里難所」と記されている。景勝地として有名な北山崎である。伊能大図彩色図を拡大すると、北山崎の断崖絶壁感がよく表現されている。朱色の測線は内陸部に引かれている。

三陸海岸も宮古市より北側になると隆起地形となり海岸段丘が発達し、その段丘崖が波で浸食された海食崖が続いている。大図の測線が海岸線に沿っているのは、野田や久慈の砂浜ぐらいである。10月7日の忠敬先生日記にも「小袖浦…難所遠見」とあり、海岸線に近寄ることができない。



第五次測量の成果である中国地方の中図と、関係する広域下図3鋪、参考絵図3鋪が展示されている。

○ 中図（中国地方）

「東海道歴紀州中国到越前沿海図 下」

国宝：地図・絵図類 番号11 縮尺216,000分の1 156×208cm

第五次測量の成果による中図2枚のうち、文化2年10月に播磨国加古郡に入ってから文化3年8月の但馬国城崎郡測量までの範囲を描いたものである。そのため第七次、八次測量で測量した中国地方の内陸部などは描かれていない。その一方で、第六次測量以後に測量した四国や九州は描画範囲ではないが、四国や九州の山々が描かれており、中国地方各地から山頂をめがけて方位線が引かれている。西日本最高峰の石鎚山には9方向からの方位線が集中している。

ところで、この中図は保存修理が終わったことから、早速のお披露目となった。修復の概要や経費については伊能忠敬記念館HPの「国宝伊能忠敬関係資料修理事業」で公表されている。元来は折り畳まれていたが、写真の様に畳まずに保存用収納軸に納めて展示されている。



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

○ 参考絵図（兵庫県明石市～加古川市）

「自播磨国加古郡下西二見村至播磨国加古郡別府村参考絵図」

国宝：地図・絵図類 番号637

壱番古宮村、弐番東本庄村、三番西本庄村、四番宮西村、五番西脇村の五ヶ村が協同して提出した参考絵図である。伊能忠敬は文化2年10月12日に西本庄村で昼食をとった後、別府村の手枕の松、尾上村の松と鐘（国の重要文化財）、高砂町の相生の松を次々とまわり、江戸時代に人気の名所スポットの「播州松めぐり」を行なっている。



○ 参考絵図（兵庫県高砂市）

「播磨国加古郡荒井村参考絵図」

国宝：地図・絵図類 番号638

この参考絵図は荒井村単独で作成提出したものである。参考絵図の荒井村は人家が一箇所に集まった集村のようである。文化2年10月13日には、荒井村まで測り、その後石宝殿（兵庫県高砂市の宝殿山山腹に祀られている巨石）へ立寄り、さらに山上に登り、山、島、近隣の村を測った。

伊能忠敬は14日にも「播州松めぐり」で曾根天満宮に参詣した。実は寛政5年4月に忠敬は伊勢参宮と関西旅行の折りにこの地を遊覧して、菅原道真お手植えの松を見ていた。測量日記には「古松龍の如く苔むして、葉短小にして鍼の如く、実に千歳も経ぬらん我国第一の古松なるべしと感じ見けるに、今年十二支を過て再来り見れば、名松は枯にけり」と残念がっている。



○ 参考絵図（兵庫県姫路市）

「自播磨国飾西郡構村至播磨国飾西郡小坂村参考絵図」

国宝：地図・絵図類 番号650

飾西郡の構村、今在家村、中浜村、英加村、広畑村が協同して提出した。文化2年10月17日に姫路城下を出立して飾万津から参考絵図の村々の海岸線を測量した。参考絵図では村々の間を街道が通り人家が連なった街村の様子うかがえるが、海浜浦々測量が目的のため大図には反映されていない。



○ 下図（中海・島根半島付近 出雲市～松江市）

「自出雲国意宇郡下来海村至石見国安濃郡仙山村下図」

国宝：地図・絵図類 番号341 縮尺36,000分の1 79.5×143.1cm

文化4年12月18日に天文方に提出した大図も控図も現存していないが、その広域下図と思われるものが3鋪展示されている。展示されている広域下図は横長で縦長のアメリカ大図162号（出雲・宍道湖）とは区割りが異なっている。黄色で示した、出雲大社～今市町の今市街道や鱈淵寺への測線は、第八次測量の帰路、文化10年11月の測量によるものであるが、この広域下図には記載されていない。以上の点から展示されている広域下図は最終上呈版の下図ではなく、文化4年版の下図といえる。



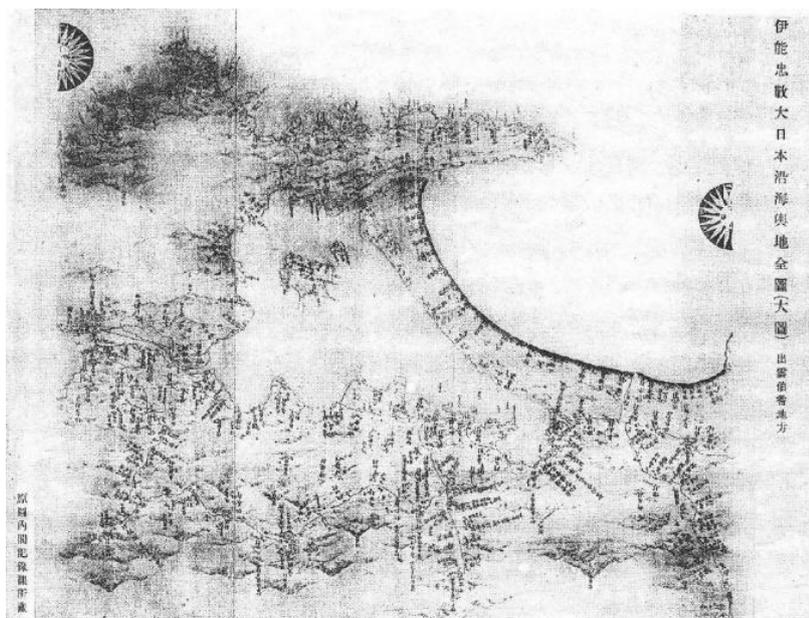
○ 下図（宍道湖・中海付近 松江市～米子市）

「自出雲国意宇郡下来海村至伯耆国汗入郡淀江村下図」

国宝：地図・絵図類 番号325 縮尺36,000分の1 87.7×144.6cm

この広域下図もアメリカ大図とは区割りが異なり、第八次測量の測線が記載されていない。右は会報38号で鈴木純子氏が紹介した明治政府に献納した最終上呈版伊能家副本の写真である。

広域下図にはない母里町(安来市)への測線や米子から岡山県へ南下する測線が描かれている。なお、下図であるため和紙10枚を貼り継いでいることが確認できる。



↑ 母里

○ 下図（山口県瀬戸内海沿岸 山口市～光市）

「自周防国室積村至周防国吉敷郡大海村下図」

国宝：地図・絵図類 番号354 縮尺36,000分の1 80.4×176.5cm

この広域下図では測線の修正が行なわれている。下松市笠戸島のヒブリ岬から鎌石岬にいたる島の東側の海岸線を作図した後で、ヒブリ岬を起点に角度と距離を若干修正した測線が朱線で引かれている。

測線の修正は全体のサイズにも影響したようで、室積村からの大海村の小磯岬までの長さを、「西四尺一寸四分九厘」と数字に朱で点を打ち、七分五厘八と訂正し、「北一尺〇一分三厘」と朱線を引いた上で八寸六分二厘三毛と朱書きで訂正している。

